



町田高ヶ坂SCは近隣の幼稚園児、小学生が活動している。技術レベルの幅が広くても、全員がゲームに関わり、楽しめるようにするためのスタイルが「ゴロでつなぐ」なのだ



ジュニア年代
クラブ訪問



How to Improve Junior Kids
ゴロのパスにこだわって
手数をかけるサッカー
——町田高ヶ坂SCではどのような指導をされているのですか？
原「サッカーをプレーするのが楽

しい」の『楽しい』は『楽(らく)』ではないことを、全学年で徹底して伝えていきます。サッカーの楽しさとは、緊張感を持って厳しい練習を積んだあとに目標を達成でき、満足感を得られる。そういった楽しさであることを知ってほしいんです。

プレーの面でこだわっているのは、パスの際にボールを浮かさず、ゴロでつなぐことです。
子供たちによく言うのは、「ボールはなぜ丸いのだろうか。それは、地面でよく転がるからだ」ということです。だから、転がってつなごう

と言っているんです。
——なぜゴロのパスにこだわって指導しているのですか？
原 町田高ヶ坂SCは、この近所の子供たちが集まってチームをつくっています。ですから、飛び抜けて上手な子もいれば技術がまだまだの子



ジュニア年代
クラブ訪問
第5回
町田高ヶ坂SC
(東京都)

「環境や流行に流されず自分たちのスタイルを貫くことが大切」

町田高ヶ坂SCは、1985年に設立され、町田市高ヶ坂地域と近隣の幼稚園児、小学校1~6年生の約110人のメンバーが活動している。指導者たちは自分たちのスタイルを貫き、信念を持って子供を育てている。同クラブOBでもある原淳・代表兼監督に聞いた。

取材・構成/石田英恒 写真/石島道康

ル・フィードバックの感覚を身につけることを重視しています。その意識づけもやはり「なぜボールは丸いのか」「丸いから、足の裏で転がせるよね」などと声掛けをしています。その成果は確実に、高学年になって生きてきます。

他チームを参考にし
いい指導を「まねぶ」

少年団ならではの指導コンセプトはありますか？
原 チームは、父兄のおとうさんコーチの協力で運営されています。スタッフはおとうさんコーチ4人、クラブ出身のOBコーチ8人、私を含めた13人と、臨時のコーチを入れて16人です。Jクラブの下部組織や大きな街クラブとは違って、指導コンセプトが確立されているわけではありません。そこで、コーチがいろいろなチームを見て、とにかくいいものはどんどん取り入れようという姿勢を大切にしています。



クラブOBでもある原淳・代表兼監督。「組織の戦い方を重視し、組織の中でどう動くかを学ぶことは、サッカーだけでなく、学校でも社会に出て必要とされる経験」と指導のポリシーを語る

「まねぶ」と「学ぶ」を合わせた「まねぶ」という造語をキーワードにしています。いろんなチームの指導を見て、いいところをまね、練習に取り入れ、子供たちの反応を見て、刺激を与えられていけば長期間やってみようという方針です。月に1度の全体会議で、どの練習が良かったか良くなかったか、こういうことをやっているチームがあるなどの報告が行なわれ、ビデオを見て、これはいいと判断したらチーム全体で共有するようにしています。

「まねぶ」と「学ぶ」を合わせた「まねぶ」という造語をキーワードにしています。いろんなチームの指導を見て、いいところをまね、練習に取り入れ、子供たちの反応を見て、刺激を与えられていけば長期間やってみようという方針です。月に1度の全体会議で、どの練習が良かったか良くなかったか、こういうことをやっているチームがあるなどの報告が行なわれ、ビデオを見て、これはいいと判断したらチーム全体で共有するようにしています。

How to Improve Junior Kids
地域の少年団の
存続が厳しい時代

ジュニア年代の現状を見て何か感じていることはありませんか？
原 今はいろんな情報が簡単に手に入るの、指導がぶれやすい時代になってきているのかなと思います。8人制になって以降、勝負にこだわるあまり、前に1人速くて大きい子を置いて、うしろで守ってロングボールを蹴るという試合運びが多くなりました。急にチームスタイルが変わり、以前とはまったく違う戦い方をしているチームが目につくようになりましたね。



フィジカル・トレーニングの効果で、練習や試合で子供たちがばてなくなり、パフォーマンスの質が高まったという

一方で、8人制になっても自分たちのスタイルにこだわっているチームもあります。強豪に対して、ゴロのパスで手数をかけてつないでいくこともありますが、コテンパンにやられることもありません。でもわれわれは、どんなに強い相手に対してもしつかりとスタイルを貫いて、もちろん結果を出したいです。

「まずゴロのパスコースがないかを探そう指導している」と原代表兼監督が力説するように、プレースタイルは全学年に徹底している



イジカル・トレーニングを行なうべきかどうかには、さまざまな意見がありますが……
原 筋力をつけるのではなく、コーディネーション(C)、アジリティー(A)、スピード(S)、クイックネス(Q)のCASQ(キャスク)の能力を高め、それを習慣化させて、全体的な運動能力を上げることが目的です。子供たちの現状を考えると、やったほうがいいと考えています。それは、サッカー以前の問題で、上手に走れない子供が多いからです。直線上を真っすぐに走れない、全力で走ると体がぶれる、手でのバランスを取れないなど、いろいろな問題があります。

その足りない部分をわれわれが把握し、方策を用意し、刺激を与えていかなければいけない、と考えて行なっています。昔はそんなことをする必要がなかったと思いますが、今はやらざるを得なくなったという面もあるのです。子供たちが将来、さまざまなことに挑戦していくためにも、この時期でのフィジカル・トレーニングは必要なことだと思います。

果も出していきたいと考えています。確かに全日本少年大会が8人制になって以降、多くのチームの戦い方が変化しているようですね。
原 練習試合は、町市内のチームとは公式戦で対戦できるので行ないませんが、市外や他県チームとの練習試合は、明確なスタイルを持つチームに対戦をお願いしています。環境や流行に流されないので、自分たちのスタイルを貫くことが大切だと思えます。指導者の言うことがコロコロ変わり、目指すサッカーがはっきりしないようでは、試合に負けたら、子供たちも何がダメだったのか分からず、次に向かうことができないでしょう。自らのスタイルを貫き通して敗れても、精一杯戦ったのであれば、子供たちは胸を張って次に向けて頑張ることができるのです。年に1度、年度前に保護者に対する説明会を行いますが、毎年言っていることは同じで、今年もウチのスタイルでぶれずにやっていくということなんです。手数をかけていくという考えもありませんが、ウチは、保護者に対しても、手数をかけたサッカーをやっていくとはっきりと伝えていきます。保護者の方々は、いろいろなスクー

ルに行つて見学するなど、少年サッカーにも詳しく、さまざまな意見を持っていると思いますが、われわれが簡単にぶれてしまいうサッカーを行なっているようではダメなのです。
最後に将来的なビジョンを教えてください。
原 地域の少年団の存続が厳しい時代になっています。特に東京では、我々の地域も含め、通える範囲にサッカースクールがたくさんあり、お金を払えばいろんなサッカーの指導が受けられる環境があります。実際にウチのチームも、町田という立地から町田ゼルビア、東京ヴェルディ、横浜F・マリノスなどのスクールに通っている子も多いです。そういう環境の中で少年団が生き残っていくためには、いかに地域に必要とされるクラブにならなくてはならないか、大事にしたいです。そこで町田高ヶ坂SCでは、ユニホームを着て小学校の周りを清掃したり、近所のお祭りに率先してみんなに参加するなど、地域に密着したさまざまな活動を行なっています。少年団の活動が地域社会に役立つことを示し、地域の方々の理解を深めていくことが必要だと考えているからです。

